平成２８年度　実践研究報告書

四万十市立具同小学校　教諭　吉岡　身佳

１　平成２７年度における研究の概要

大学院では、「発達障害のある子どもの特性に基づいたユニバーサルデザインの授業づくり」を研究テーマとし、発達障害など特別な支援を要する児童を含む学級のアセスメントを行い、その学級全体の特性に応じた授業改善に向け、ユニバーサルデザイン（以下「ＵＤ」）の視点に基づいた学習環境や指導方法、授業の進め方の検討を行った。

授業実践の結果、課題であった授業逸脱行動が減少し、落ち着いて学習に取り組めるようになった。ＳＤＱ及びＱ－Ｕの介入前後の比較からも児童の行動の肯定的な変化が認められた。また、ＵＤチェックリスト及び単元テストの結果から、教師の授業力の向上と児童の学力の全体的な向上も窺え、UD の視点に基づいた授業づくりの有用性が示された。

２　平成２８年度の実践内容

パターンＡ・Ｂ（自閉スペクトラム症と診断された者）、パターンＣ（ADHD と診断された者）、についての実践研究を行い、発達障害のある児童を含む通常学級において、UD の視点に基づいた授業づくりや学級経営の実践を行うこととした。

実態や課題、取り組み内容を表１に示す。

表１　　実態・課題と取り組み内容

	実態・課題	取り組み内容
パターンA	・作文や感想など自分の思いを表現すること ・コミュニケーションをとること ・家庭学習や身の回りのことができるようになること	教師の支援がすぐにできるよう、廊下側の最前列に座席の配慮を行った。授業中は、全体指導や全体指示を出した後、個別に関わることを多くし、様子を見ながら支援をはずしていった。 作文を書く際には、構成メモを書いたり、イメージマップを用いて想像させたりし、こちらが質問しながら文章をつなげるようにさせた。コミュニケーションをとるのが苦手なため、必要なことは自分から伝えるように意図的にそのような場面を仕組んだ。家庭学習については、交流学級の児童と同じ内容にした。
パターンB	・学校に登校すること	学校という場に抵抗があるため、学校行事や校外学習の際に参加できるように配慮した。給食の時間は交代で友だちと一緒に食べるようにした。校内の教員と情報交換を密にし、児童の様子を共有するとともに、学校の様子を児童に伝え安心感をもてるようにした。
パターンC	・集中して学習すること ・自尊感情や自己有用感を高めること ・排泄の失敗をなくすこと ・給食を食べること	座席を最前列のまん中にし、授業に参加できているか確認しながら声をかけたり個別の支援をしたりしながら進めるようにした。授業の流れが変わる際には、必ず黒板に学習の流れを掲示した。特性を活かして整理整頓係を任せた。授業中はトイレに行ってはいけないというこだわりが強かったので、行ってもよいということを確認し、その際には意思表示をするということを決め、周りの児童にも理解してもらうように配慮した。給食は無理強いをせず、食べられる量から始め、様子を見ながら給食指導を入れていった。
学級全体	・落ち着きはあるが、自主性・主体性に弱さがある。 ・自信がなく、自己肯定感が低い児童が多い。	学習規律の徹底を図った。ペア学習やグループ学習を多く取り入れ、関わりながら学習できるようにした。学習や生活の決まりを守るよう指導し、行動レベルで分かりやすく伝えた。褒め言葉のシャワーを帰りの会で毎日行った。

（結果）

パターンＡ：自立活動の時間以外は、すべての学習に参加できるようになった。自分の思いを文章にすることへの抵抗も徐々に少なくなってきた。時間割もきちんとできるようになり、忘れ物も減った。休み時間には

特定の児童だけではなく、他の児童との関わりも見られるようになってきた。

パターンB：修学旅行や運動会、マラソン大会などの大きな行事に参加することができた。教室内での学習に参加できることはなかったが、給食の時間や校外学習では友だちと関わることができた。５月に実施したQ-U の結果は学級生活不満足群に位置したが、１２月の結果では傷害行為認知群に位置し、承認得点が２ポイント上昇していた。

パターンC：手遊びをする姿やノートテイクをしないなどの姿は見られなくなり、どの教科でも集中して学習に取り組むことができるようになった。苦手であったペア学習やグループ学習にも参加できるようになった。係の仕事ぶりから友だちに認められることも多くなり表情も明るくなった。授業中でも自分で意思表示をしてトイレに行くことができるようになり、排泄の失敗もなくなった。給食は、３学期には、ほぼ毎日完食できるようになった。５月に実施したQ-U の結果は要支援群に位置していたが、１２月の結果では、要支援群を脱していた。

学級全体：学級全体のQ-U の結果を図１に示す。

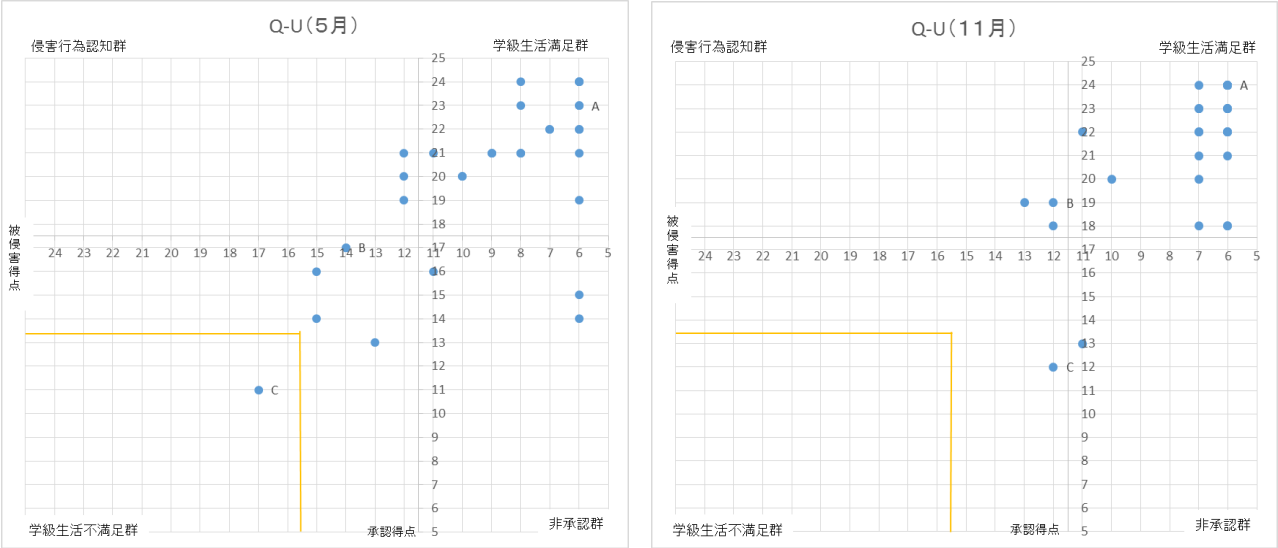

図１　Q-U の結果の比較

３　平成２８年度の実践の成果と課題

実践の結果からパターンA、C においては、通常学級で落ち着いて学習し、児童それぞれの課題も改善された。またパターンA、B、C ともに、自己肯定感や自尊感情の向上が見られ、学級全体としても同様の結果が得られた。これらの結果から、今年度の実践は一定の成果を上げることができたと考えられる。

通常学級で個に応じた支援を提供するためには、それを認め合える学級集団でなければ効果は発揮されない。そのためには、授業づくりと学級づくりの良好なバランスが重要であり、この２つが相互に機能することによって、より良い効果をもたらすことができると考える。また、支援を要する児童の特性や学級の実態から、効果的なUD の視点を取り入れることが大切である。今年度は、アセスメントが十分とは言えなかったため、よりエビデンスに基づいた具体的な支援を講じることが今後の課題である。